

阪神淡路大震災 30 周年記念 現地訪問レポート

令和 7 年 1 月 21 日

日 時 令和 7 年 1 月 16 日、17 日、18 日

参加者 樋口、早川、池田、片山、田中

場所日程 16 日 関西広域連合、神戸市役所資料室、松山氏との懇談

17 日 慰霊黙祷と行事、人と防災未来センター、同図書室、兵庫県立美術館

18 日 新長田駅周辺開発状況、神戸布引ハーブ園

結果報告

1. イベントで印象に残ったこと

(1) 関西広域連合(古林智宏副課長との対談)(1 月 16 日) 池田、片山、早川・樋口

・関西の 2 府(大阪、京都)6 県(鳥取、兵庫、滋賀、奈良、和歌山、徳島)4 市(神戸、大阪、堺、京都)で構成される。結成から 14 年。

圏内人口は、2,000 万人 地方公共団体 設立より 14 年

(感想)

* 東京に対抗するという意味合いではなく、域内で統一して対応した方が住民の利益になることを 1 つ 1 つ実現してきた。

(防災・減災に限らず、医療体制、環境保全、資格試験・免許の統一など) 各県ごとに担当を決めて遂行しているが、それぞれが頻繁に連絡を取りあい、情報交換を行って施策に活かしており、壁が低い。

・自然災害も県境で被害が止まる分けではなく、各種の事柄について府県を越えての連合は素晴らしい事だと思った。この考えを全国に広め、さらには国を越えての連合に発展すれば戦争も 無くなる?! かもしれないと思う。



(2) 市役所資料室見学 (1 月 16 日) 池田、片山、早川、樋口

・池田さんに呼んで頂いた市役所職員の方が案内・説明してくれた。

(感想)

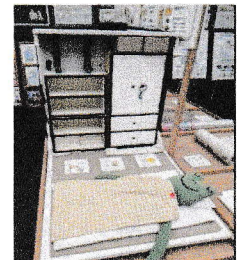
* 展示がリニューアルされ、子どもにも分かり易い内容になっていた(防災教育にも利用) 市内の区毎でなく、神戸が 1 つになって取り組んでいる(横浜とは対照的)

* 展示内容は数年前と大きく変わった印象は無かった。

「防災カルタ」ゲームの前で、神戸消防が約 10 年前に作った

「ダイレクトロード」と言うゲームの話をしたら 御存じなかった。

行政マンは 3~4 年で転勤になるし、30 年も経過すると震災を知らない人も多いのかなと思った。



(3) 松山氏(元神戸市役所職員)との交流(1 月 16 日) 池田、片山、早川、樋口

・松山順三氏は、元神戸市役所職員で、訪問時には毎回懇談しています。現在は地域に入り、元行政マンとして行政との橋渡しをして実績が出ていたとの話でした。今回は奥様も出席し、今の活動状況を(趣味の絵画も含め)楽しんでいると伺った。

(感想)

* 松山さんご夫妻との会話、ごちそうを食べながら有意義でした。

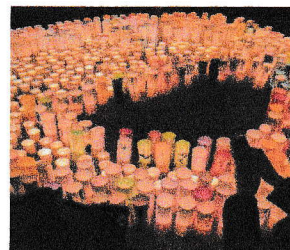
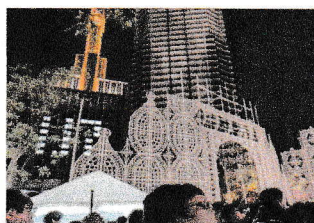


松山さんの様な行政マンが地域に多くいれば、災害だけでなく、様々な事が良くなると感じた。松山さんの奥さんの協力と後押しを強く感じました。

* 別紙の「松山さんからの手紙」を頂きました。(池田)

(4) 阪神淡路大震災 30 周年慰霊 (1 月 17 日) 池田、片山、田中、早川、樋口

・17日5時46分のセレモニー 神戸市役所横の公園がイベント広場、被害者関係者の当時の様子の後、時報と共にともに1分間の黙祷を行った。テーマは「よりそう」で広場の中の竹を切った節の上に灯をともし、ビルには1. 17の文字が打たれ、地下の追悼記念館の被害者銘板に祈った。



(感想)

・「いつも一緒に暮らしている人が、明日は突然いなくなるかもしれない。だから今を大事にして、やれることを精一杯行い、一日一日を丁寧に生きて行かなければならない」という被災体験者(母親と兄弟を亡くされた)の挨拶があり、その通りだと思った。

イベント中シャボン玉が飛び続けていた。これは人の儚さと共に、希望を生み続けなければ・・・という想いの表れでなかったか。

30 周年として、もっと盛大なセレモニーを期待していたが、拍子抜けだった。

(5) 人と防災未来センター (1 月 17 日)

池田、片山、田中、早川、樋口

震災の経験と教訓を未来に伝え、防災減災シャイ実現のために必要な知識を展示資料や当時の映像、被災体験者の話などすべてが学習できる場です。同館の資料室も訪問した。

(感想)

* 爆音とともに建物が崩れ落ちる映像が忘れられない。構造物の破壊は全てを無くしてしまう。それがいつ起こるかもしれない恐怖。→ それでも諦めず対策することが必要。

* 見学出来た展示館も目新しい物は殆ど感じられなかった。

相変わらず、30 年前の被害写真や震災後の避難生活写真が多く、それらを踏まえて新たな災害に対して、減災への取組指針や提案的な「防災未来」展示は殆ど見られなかった。

(6) 兵庫県立美術館 (1 月 17 日)

樋口、早川、田中

・「30年目のわたしたち」をテーマに7名の芸術家が、カラフルな幕やなぞの盆栽から始まり、風景写真、能楽師の謡、エンジンの水中稼働もありました。最後は声や音の作品で魂を呼び起こす作品を展示していました。

(感想)

・写真や絵画・映像での展示があつたが、「自分たちが実は、とても脆い(危なっかしい)基盤の上に立っていて、それが絶対安全だとは言いきれないのだ」という事を、訴えていたように思う。何をすべきかを自分の頭でしっかり考えて、見定めていかなければならないと思う。

(7) 人と防災未来センター屋外テント(展示)での交流(1月17日)

樋口、早川、田中

(感想)

* 若い人たち(学生・生徒)が一生懸命に出来る事(課題)に取り組んで説明している姿が印象的、明日への希望を感じる。

* 県の防災と福祉の連携による個別支援計画促進事業は福祉職から学習していた。

(8) 都市再開発の復興状況(神戸市長田区)(1月18日)

田中

神戸市は市長指示13~5日被害状況把握、2週間目に復興体制。国県市で復興会議 2か月後に都市計画決定(3市6地点)した。特に震災時には建物83%が全半壊消失した JR 新長田駅周辺20ha の南地区駅周辺を訪問した。シューズ等製造業、古い商店街住宅街を改造し、住宅と商業施設を作った。住民は増えたが、商業施設は半数に減り、大赤字となった。マンション建設は、時期をずらして着工、遅々として進まず30年かかった。



(感想)

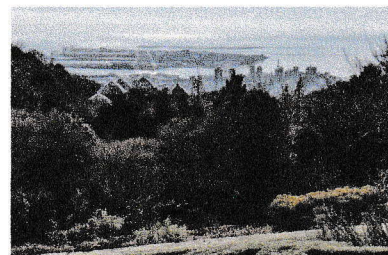
* 高層住宅が各所に配置され、商業施設も入居されていた。南口は駅前広場とロータリーを作った。周辺の人通りは多かったが空き店舗も目立った。

30年かけて建設と入居を繰り返す方式は失敗の原因。10年程度で反省したか。

(9) 神戸布引ハーブ園(1月18日)

早川、樋口

新神戸からロープウェーで7~8分。神戸の町が一望できる六甲の絶景スポット。



2. 次世代に残したい事項

(1) それぞれの災害に会われた方(被災者)は何時かいなくなり、時と共に記憶は風化する。だから次代を担う方へ伝えるとともに、彼等の心にしっかりと残る様な伝え方(教育)も必要になる。その意味で、17日に行われていたテントでのプレゼンは、参考になった。

(2) こうやって被災地へ行く事によって自分自身の防災への取組がリフレッシュされる事は確実にあります。

また、神戸には行きたいし、能登にも行きたいと思います。

(3) この30年で子供だったのが大人となり防災活動を発表している。学校教育に防災と福祉の融合、体も頭脳も健康が大事なことだ。

3. 課題

(1) 30年目の今の評価(プラス面)と未来の見える化をどう示し、伝えるか。

(2) 次世代の若い人や、海外から来ている外国人への防災の伝え方。また、彼らが共に活動できるようにするには、何が必要かを考えてみたい。

松山順三様(元神戸市役所職員)からのお手紙 (池田邦昭さん宛てのメール)

あの日は 連休の明ける日、さア今日から頑張るぞ！と思っている日、とても寒い日でした。5時46分 いきなり突き上げてくる強い揺れ、まだ地震とは気付かず 家中がガタガタと悲鳴を上げ、これでは家が潰れる！と感じて、妻に覆いかぶさりました。本当に家が潰れてしまう！と、全身の力を出して腕と脚を突っ張りました。どれほど長い時間だったかしれません。実際には20秒ぐらいが本当に長い時間に感じました。

グラッと来たら机に潜れ？としていますが、夜中に突然の揺れ！です。停電の真っ暗の中では、頑丈な家具に身を隠すことすら 難しく思います。

わが家では、、暗くなると灯かりがつく懐中電灯を廊下に幾つか置いています。

人が近づくと点灯する灯りも幾つか置いています。あの日の、この灯りは役に立ちました。以来ずっと廊下には配置しています。

揺れが収まり、助かった！と思いながら娘二人を見に行きました。

一人は、本棚が倒れて 布団の上に本が散乱した状態で、布団に潜っていました。

もう一人は、洋服ダンスが倒れていましたが、幸いにも布団からは離れていました。

結局 娘二人は怪我もなく助かりました。

真っ暗な時に突然にやってくる強い揺れには、どう行動できるのか、今も自信がありません。

昼間なら咄嗟に行動はできるかもしれません。

とにかく、家具は倒れないように固定しないとダメです。何よりも、家が倒れ潰れない耐震化が絶対に必要です。東北でも、能登でも耐震化できていない家が潰れました。

とにかく、町を地震でも倒れない耐震化が絶対に必要です。そうすれば人的被害は抑えられます。

そして、火災は漏電が原因です。しかも家が潰れたら、ガスも漏れて火がつきます。大火災の原因はこれでした。

真っ暗な夜中でも夜中行動できるように、人感センサー付きの懐中電灯を、廊下や寝室には必要です。わが家でも、そうしています。普段でも便利です。

●だるまは、池田さんや今日のリーダーのご活躍おかげで、素晴らしい活動が続けられてきました。これからも、自分たちの家族のため、それが地域や町の安全につながります。

今は、対策は自衛隊や消防警察、に期待していますが、発災後すぐに動けるのは近隣住民だけです。

被害者を救出したのは、大部分は近隣住民の活動でした。今もそうだと思います。だからこそ、日頃のお付き合いが大切です。

津波が予想されても、近隣が声を掛け合って、一緒に避難できます。

自助 共助が大切です。

役所も人員削減されています。警察も消防も、大災害時には行動が迅速ではありません。発災から3日は、家族と近隣住民の活動で、命と災害から守っていかなければなりません。

これからも、だるまの皆さんが社会を啓蒙されて、安全な街に繋がっていかれますよう祈っております。池田さんや皆さんに、心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。